

保健師 最前線

求められる

瞬時の判断力

京都市

おおくら
大倉
みほ
光帆子さん



震度7の地震に2回見舞われた熊本県益城町に今年5月、同僚の保健師や管理栄養士の4人とともに京都市から派遣された。担当した避難所（小学校の体育館）はカーテンの間仕切りもなく被災者であふれていた。「震災から1カ月ほどたっていました。ペシヤンコになった家や車中泊があちこちで見られ、震災の傷跡はまだむき出しの状態でした」と話す。

避難所の被災者の健康チェックが主な仕事だった。「私が行った時は雨がひどくその雨風の音で寝られないという訴えが多かった。余震などによるストレスや疲れがたまり、ちよつとした症状でも急に悪化することがありますので気が抜けませんでした」

派遣されて間もなく50代の女性から突然、4月の地震発生時の状況を涙ながらに初めて打ち明けられたという。家族がバラバラになり一人で避難所を探し求めた。どこも満員で何度も断られ、さまよいながらようやく今の避難所にたどり着いたと話した。「被災者に寄り添い話をじっくり聞き、保健師がボタンをつないでゆく大切さをあらためて知った」と話す。「私で第9陣の派遣になるんですが、これまでの先輩や同僚がこの方の話に耳を傾けて信頼関係を築いてきた結果だと思えます」

「健康を守る最前線にいますので有事が起った際は、混乱する中、その場、その場で瞬時の判断力が求められます。また新しい情報をい

かにして集め、その情報をどう生かすか」。保健師になって4年目。「経験が浅いからという言い逃れは現場では通用しません。わずか5日間でしたが課題が多く、自分の力不足を身に染みて感じました」

今春から保険年金課に異動し特定保健指導などを担当している。「生活習慣へのアプローチは難しいところもありますが、その人の生活や気持ちに寄り添うことが保健師活動の基本だと感じます」

京都市では血圧や血糖が重症な健診結果でも未治療の人が多い現状から、今年度から健診後の医療機関への受診勧奨事業を始めた。「せっかく受けた健診をいかしてほしい、大きな病気になる前に対処してもらえたらという思いで進めています」。静かな物腰の中に強い意志を感じた。

派遣期間が終わり避難所を去る時、先の50代の女性が声を掛けてくれた。「遠い京都からあなたがとう。この花、持って帰って。あなたに幸せが訪れますように」。後片付けに帰った自宅に咲いていたという四葉のクローバーをそつと手渡してくれた。

「京都に帰ってから、いま地震が起きたらどう行動したらいいか、歩いている時も考えるようになりました」。そう話しながら、押し花にした四葉のクローバーを見せてくれた。